

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 ( 文学 ) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	郭 璇
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 日本近現代文学における中国人苦力の表象——中国東北地域を舞台とした作品を中心に——			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授	溝渕 園子	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	中村 平	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	金子 肇	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	准教授	柳瀬 善治 (総合科学研究科)	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	特任教授	河西 英通 (森戸国際高等教育学院)	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、明治期から戦後に至るまでの日本文学において、中国東北地域すなわち満洲の〈苦力〉(以下、苦力と記す)がいかに表象されたのか、巨視的な視野でその系譜を辿るとともに、苦力表象に投影された日本人作家各々の認識がいかなるものであったか、ポストコロニアル理論を援用しつつ考察するものである。旧満洲を舞台とする作品群のうち、リアリズム小説からプロレタリア小説・詩、前衛派の詩、大衆小説に至るまで、多様な文芸思潮やジャンル、作家の性差を考慮して、作品を選定している。本論文は序論と結論を含む全10章から成る。</p> <p>第1章では、研究の背景、先行研究、問題提起、研究の目的と方法及び意義について述べる。</p> <p>第2章では、苦力の歴史及び日中近代文学に描かれた苦力の概況をまとめる。中国人の不精錬労働者である苦力に対する認識には、日中両国の作家の間で温度差が見られ、苦力との直接的な接触の機会が多い日本人作家の方が関心も高く、その表象は日本の支配下にある「最下層」の人間という性質を帯びていたことを論じる。</p> <p>第3章では、夏目漱石の紀行文「満韓ところどころ」(1909)を中心に、E. サイド『オリエンタリズム』を手掛かりとして、時代状況を踏まえた分析を行う。作品では、苦力とそれ以外の中国人表象との間に分断が認められ、そこから植民地支配を根拠とする不平等な権力関係の実態を指摘する。</p> <p>第4章では、里村欣三の小説「苦力頭の表情」(1926)を取り上げ、表象としての「満洲苦力」を「ロシア淫売婦」と比較しつつ、「捨て子」である語り手「俺」のアイデンティティの問題と関連付けて検討する。自己規定に悩む「俺」が、理念上はインターナショナリズムを標榜しながらも、現実には人種的、民族的優位性を担保するようにして、一人の植民地の日本人として主体性を確立する過程を示す。</p> <p>第5章では、プロレタリア作家平林たい子の小説「敷設列車」(1929)について、支配—被支配の構図と、名を持つ苦力の意味を考察する。作家が、日本人である自身と苦力との間にある権力関係を意識した上で、超越的な視点から苦力に個としての主体性を与え、彼ら自身に語らせようとしたことを論じる。</p> <p>第6章では、満洲プロレタリア文学隆盛期の代表的な詩誌『戎克』(1929—1930)及び『燕人街』(1930—1931)を対象に、満洲詩における詩の技法と内容から苦力表象を検討する。前者はシュールレアリスムの芸術表現に特色があり、後者は満洲の生活や歌謡を素材にした、単純明快なリアリズム表現に重きをおく。一見対照的でありながらも、両誌の詩には被支配者としての苦力をめぐる表現に共通性が認められる。満洲の文学空間の先端にいた詩人たちは苦力の代弁者であることを志向し、〈他者〉であ</p>			

る彼らの心の声を語ろうとしたと述べる。

第7章及び第8章では、牛島春子「苦力」(1937)と八木義徳「劉廣福」(1944)を取り上げ、苦力とその日本人監督者との関係性に着目し、〈民族協和〉に対する両作家の認識の相違を分析する。「苦力」において苦力は植民政策の論理に包摂された存在であるが、不平等な関係や〈民族協和〉の矛盾を自覚した日本人監督者が抱く国策への内的葛藤も克明になる。一方、「劉廣福」の理想化された労働者としての苦力表象から、コロニアリズムとナショナリズムに包含された作家の認識を読み取る。

第9章では、水上勉「瀋陽の月」(1986)と宮尾登美子「朱夏」(1985)に見られる〈自己〉の語りに注目し、戦後文学における苦力表象の位相について議論する。これらの回想的作品では、共に苦力を介した〈自己〉表現が目指されており、〈他者〉であった苦力が植民者である〈自己〉を顧みる鏡としての機能を持つことを述べる。

第10章では、論文全体を総括した上で残された問題を挙げ、今後の研究の展望を示す。

本論文は、各作品論を通時的かつ多角的に連結しながら、苦力の全体像を浮き彫りにすることを試みた、苦力表象をめぐる主題研究である。作家や同時代の文芸思潮等、作品が置かれた各文脈への目配りにおいて課題を残すが、地道な調査と未公開資料に基づく新たな知見、研究蓄積が少ない問題領域への挑戦、文学と歴史学とを架橋する研究への発展性の点で高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士(文学)の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)